

一、古裂の整理

昭和四十年年度においては中倉所屬第八一、八二、八三、八四、八五、八六、八九、九〇、一〇八号横に残存する錦綾羅絹絁の残片の整理を主とし、前年に引続き南倉所屬の第一二六号横に納める幡類残闕の整理を併せ行つた。その結果は次のとおりである。

- 一、布 襪深形 三隻 (南倉)
- 一、布 襪 一隻 (同)
- 一、襪布心残闕 二合 (同)
- 一、純脛裳残闕 布心 二片 (同)
- 一、貼古裂新造屏風 一扇 第二七号 (中倉)
- 一、大幡垂脚残片七片を貼る。 (同)
- 一、古裂 帳 六十九冊 第六〇六号—第六七四号

錦類五千六百四片、蒔夾纈纈類三千二百九十片、羅五百二十片、絹絁類九千二百四十五片、計一万八千六百五十九片を分貼する。

二、宝物の修理

本年度において宝物の修理を終えたものは次のとおりである。

一、馬 鞍 第二号

鞍橋、鞍褥、鞆、厩育、鐙、銜、三懸等を具備する。鞍橋は両輪は牟久木、四枚居木は極を用いている。鞍は黒塗皮製で鞍付孔には魚子地に唐草を毛彫した座金を付けている。鞍褥は破綻し裏裂の麻布だけが存する。鞆は黒漆塗の皺革でこれに町形文をきめこみ、裏は白革で作る。厩育は表を白絁に、赤地錦の広縁を莊り裏も白絁を張る。鞆、厩育共に心に蘭筵・布・柳葉を重ねてある。鐙は鉄製黒漆塗の壺鐙で、雲鳥唐花の銀鏤の裝飾がある。鐙韁は黒漆塗の革製、その端金物は魚子地に花枝を彫り上げ、責金具と共に金銅製であるが、力草にかかる鉸具は鉄製となつている。銜はいわゆる蒺藜銜に属し、鉄製、唐草文の銀鏤を施す。三懸は黒漆革、金銅杏葉の飾り金具のほか金銅製の撰蝶金具を並べ、金具には水晶琥珀玉を嵌めてある。腹帯は麻布で先端に「天平勝宝四年十月」の墨書がある。

一、螺 鈿 箱納玉帯箱 一合 (中倉)

円形印籠蓋造りの漆箱で、漆地に螺鈿を莊つたものは宝物中ただこの一例を存するのみである。

一、銀平脱箱第五号鏡箱 一合 (南倉)

中央珠圈内には双翼を張つて旋廻する双鳥をおき、外区の花枝文は牡

丹樹を思わせる重厚なもので奈良時代平脱文としても特異な図様であるが、その雄大な構図はさすがに当代の氣宇をうかがうに足る。そして平脱の技術にも数ある院藏平脱文中でも巧みな彫法が見られる優品である。中に納めた平螺鈿背円鏡と共に伝えられている。

- 一、六角 櫛箱第十三号鏡箱 一合 (南倉)
 - 一、漆 皮 箱第七号鏡箱 一合 (同)
 - 一、金銀絵漆箱第十一号鏡箱 一合 (同)
 - 一、漆 皮 箱納裏衣香 一合 (中倉)
 - 一、漆 箱第三十八号 一合 (同)
 - 一、漆 皮 箱第一号、第二号 二合 (同)
 - 一、四重漆箱 一合 (同)
 - 一、漆 皮 箱第八号鏡箱 一合 (南倉)
 - 一、漆 皮 箱第十五号水精誦数箱 一合 (同)
 - 一、漆 鉢 五口 五口 (同)
 - 一、漆皮箱残闕 三隻の内 一隻 (同)
- 右いずれも原状を損しない程度の維持修理を行った。

三、刀劍の研磨

宝庫に伝存する刀劍類は杖刀二口、大刀五十三口、手鉾五口、鉾三十枚、刀子五十四点の多きに達し、いずれも明治年間に研磨されたものであるが、近年調査の結果、アセロ様の錆が随所に生じ、またいわゆる

「ヒケ」も多いことが判明したので可及的速かに研磨を行い、錆の進行を除去する必要を認め、去る昭和二十七年において早急に研磨を要する大刀三口について研磨を行った。その後さらに精査の結果差当り第一次計画として大刀類三十九口、手鉾四口、鉾二十二枚、刀子十九点(二十一口)の研磨を昭和三十三年より実施し、本年度を以て研磨の工程に工夫を要する金鏤星雲形の呉竹翰御杖刀一口を除き悉皆完了した。

四、経巻の修理

聖語藏経巻の修理もまた前緒を継ぎ乙種写経五十巻を完了した。すなわち次のとおりである。

- 一、乙種写経 経律異相 三十巻 卷二一―一六、一八―二〇、第三八号 四巻 卷一―四
 - 一、同 古今訳経図記 九巻 卷九、一七―二〇、一四、第四〇号 九巻 一五、一七―二〇
 - 一、同 続高僧伝 一卷 卷九、一七―二〇
 - 一、同 仏説転女身經 一卷 卷九、一七―二〇
 - 一、同 婆藪槃豆法師伝 一卷 卷九、一七―二〇
 - 一、同 業成就論 一卷 卷九、一七―二〇
 - 一、同 沙弥之戒及威儀 一卷 卷九、一七―二〇
 - 一、同 百喻經 一卷 卷九、一七―二〇
 - 一、同 無明羅刹經 二巻 卷一、卷二―三
 - 一、同 本経は卷二、卷三を合せ一卷となす。
- 右経巻はおおむね鎌倉時代の書写本であつて、紙背に応々梵字あるい

は宝塔の黒印が捺してある。それぞれ旧態を維持しつつ修理し、標紙または軸の逸失するものは古様に似して新補した。

五、宝物の特別調査

(1) 大刀外装調査

昭和三十八年度より実施の大刀外装調査は一部実測を残し本年度をもつて終了した。本年度においては北倉の御杖刀二口をはじめ中倉納在の大刀十五口、南倉の樂大刀四口で、これをもつて宝庫に蔵する外装のある大刀類三十三口の調査が完了した。

本年度の調査において特に注目すべきは中倉所納の黒作大刀第廿四号の漆鞘表面に二・五厘幅の刷毛目の痕が歴然と止められていることである。これによつて今まで全く不明であつた漆工用具の一端を窺い知ることができ、漆芸史上貴重な遺品といわなければならない。

調査員は日本芸術院会員松田権六、関西大学教授文学博士末永雅雄、東京芸術大学教授内藤四郎、文化財保護委員会事務局美術工芸課主任文化財調査官尾崎元春の四氏である。

(四) 伎楽面調査

正倉院の伎楽面はすべて百七十余面、このうち三十数面は乾漆造りで他は木造である。これ等の伎楽面には内面に曲名あるいは作者名を墨書

するものが多く、わが上代演劇史上貴重な存在であるばかりでなく、奈良時代の彫刻としても高い価値を有するものである。今回の調査は後世形式的に伝えられ遂に断絶した伎楽の源流を詳かにすると共に奈良時代に盛行した仏像彫刻とは別な仮面彫塑の特質を明らかにせんとするものである。

本年度においては木彫面のうちその六十口（第一号―第六〇号）について調査を行った。調査員は奈良国立文化財研究所長文学博士小林剛、元東京国立博物館学芸部長野間清六、京都国立博物館美術室長文学博士毛利久、元奈良学芸大学教授長屋謙三の諸氏である。